

Title	第3回：那覇市立真地小学校と繁多川公民館の連携について
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？ - 地域再生と教育再生の相互作用 - : 58-78
Issue Date	2012-02-23
URL	<a href="http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25798">http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25798</a>
Rights	

琉球大学学術リポジトリ  
University of the Ryukyus Repository

### 第3回：那覇市立真地小学校と繁多川公民館の連携について

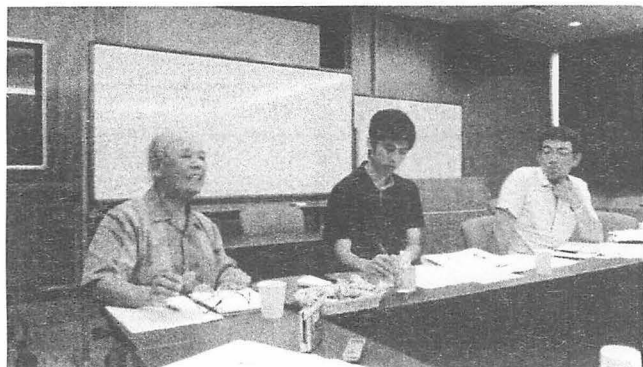
と き：平成23年6月25日（土）10：00～12：00

場 所：琉球大学 文系総合研究棟 703

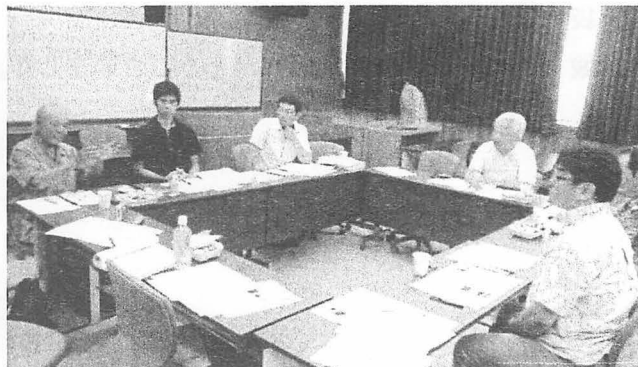
対象者：南 信乃介氏（NPO法人なはまちづくりネット）

久高 将一氏（かりゆし友の会）

調査員：6名（佐藤学、大城武秀、嘉数学、濱里正史、前城充、中村任子）



▲左から久高氏、南氏、嘉数氏



▲聴き取りの様子

（敬省略）

嘉 数：今日は、繁多川公民館で主に「あたいぐわープロジェクト」で頑張っていらっしゃる南さんと、「かりゆし友の会」、これは真地小学校で頑張っていらっしゃるボランティアサークルですけれども、その久高さんをお呼びして、真地小学校を中心に地域の人々が学校、生徒含めて連携していく様をみなさんに聞いてもらいたいと思います。

離島や村に比べて、都市部ではやはり自治の力が少し弱くて、繁多川公民館のように地域住民をサポートする方がいて地域に活力をもたらす団体がいるという、真地小学校との関連をぜひ紹介したくて、今回のような会合をお持ちしました。

まずは、南さんの方から「あたいぐわープロジェクト」など、繁多川公民館の取り組みをお願いします。「あたいぐわープロジェクト」がどのように学校と連携していくのか含めてお話していただきたいと思います。

南：おはようございます。繁多川公民館で、団体としては「NPO 法人なはまちづくりネット」の南信乃介と言います。宜しくお願いします。

まず、団体でどういう立ち位置にいるのか軽く説明しますと、「NPO 法人なはまちづくりネット」が那覇市教育委員会から一部業務受託で繁多川公民館を受託しています。県内初の事例として、平成17年からスタートして今3期目、7年目に入ります。現在、学校や地域と連携して活動させていただいているところです。

公民館の中でいくつか仕事があるのですが、みなさん、自治公民館と条例公民館ってわかりますか？飛ばしていいですか？はい。

いくつか講座を運営したり、常日頃公民館の中を使って、42のサークルさんを活用しながら、主催事業として講座をだいたい対象別に年間10から20講座を企画してやっています。その中

の一つが「あたいぐわープロジェクト」で、今一番大きな広がりを見せているプロジェクトになります。

お配りした資料に「あたいぐわープロジェクト」の趣旨と経緯があります。最初、公民館を受けた時に、繁多川地域ってどんな地域なんだろうということが、まったく文献からも図書館に行ってもあまり出てこなかったということで、この地域と一緒に何かやるときに、地域のことをもう少し勉強しながら、地域の方を先生にして聴き取って、それをゆくゆく地域の方が勉強できるように、この地域ってこんなことがあったんだね、こんな文化財があったんだね、という歴史を持っているんだね、ということ聞き取りして残していくっていう講座をしよう、ということで「繁多川見聞録」という講座を平成 17 年、スタートしてすぐに行ないました。

その中のいくつか聴き取りのポイントとして、衣食住、生活にまつわることを中心的に聞いていって、沖縄国際大学・沖縄大学非常勤講師の波平エリ子先生という方を講師に招いて、一般参加者、それから 2 年目からは沖縄大学の学生が授業の一環として関わり、地域住民から聞き取りを進めていきました。全部で 3 年間、計 5 シーズン聴き取りを継続していく中で、繁多川という地域は実は水が豊富な地域であったこと、壕がたくさんあったのでその中でパナマ帽を編んでいたなということ、それから戦時中は 32 軍指令軍が首里にあったのでそれと近くにあった関係で、県庁や警察関係の壕として利用されていたこと、それと戦前から戦後にかけて水を利用しての豆腐作りが大変盛んだったこと。各家庭だいたい 3 軒に 1 軒くらいは豆腐作りをしているくらいの割合で、その辺り中ほとんど豆腐作りをしているというくらい盛んだったようです。だいたいお母さんが作ってお父さんが畑に行っているという関係で行なわれていたという聴き取りが主に出てきて、「昔の豆腐は美味しかったね。切ったら切り口が白く光ってすごく美味しかったよ。」という話を聞いてですね、「へえ、今の豆腐と違うんですか？」と聞くと、「昔は青ヒグ<sup>アヲ</sup>という在来大豆を使っていたよ。作り方も綺麗に殻を開けて、丁寧にずっと、熱くてもおからをより分けるのを辛抱強くやっていたよ。」と色んな話が出てきて、昔ながらの豆腐を食べてみたいね、ということが徐々に 3 年間を通して、地域のみなさんもこれをすごく大事にしたいな、地域の中で誇りにしたいなと思う部分がそういう形で上がってきたんですね。ある意味たぶん、熟成されてきたんだと思います。最初から豆腐がいいねという話はなかったので、3 年間聴き取りを地域の方十何人にする中で、自分たち地域には川が大事だったよ、豆腐というものが生活を支えていたよ、というのをもう一度、在来大豆の栽培と昔の豆腐作りを復活することで地域の交流をしよう、ということでスタートしたのが「あたいぐわープロジェクト」のきっかけでした。

実は、青ヒグを探し始めたもののなかなか見つからない。県内ではほとんど途絶えているということが分かって、輸入の大豆がほとんどで、栽培しているところも見つからないということだったので、農業試験場にわずかに残っていることが分かって、そこをお願いして 10 粒分けていただいた。しかし、実は 1 度失敗してしまいました。もしかしたら種が古かったかもしれないし、栽培経験が昔を思い出しながらなので誰もほとんどなかったということがあると思うんですけど。もう一度農業試験場に 10 粒もらってきて、波平先生がプランターで 200 粒ほどに増やしました。200 粒に増えた時点で、これで以前言っていた在来大豆栽培での昔ながらの豆

腐づくりを復活させようじゃないか、ということで繁多川の自治会さんにご協力を仰ぎ、一緒に共催で「あたいぐわープロジェクト」を立ち上げました。

あたいぐわーというのは家庭菜園のことなので、それぞれ地域の方の小さな庭やプランターでできる限りでやりましょうということで始めて、久高さんも参加してくれていますけれども、今だいたい15名くらいの方々の家庭で大豆が育っております。

あとは、楽しみながらやろうということで、スローガンとして一丁一万円のブランド豆腐を作ろう大作戦で（笑）、本当に一万円で作ってはいないですけど、どうせ作るなら夢を持ちながら、一丁一万円くらいのものを作っちゃろうじゃないかということで、楽しみながらスタートしたということがあります。

実際に進めていくうちに、地域文化というのを地域の皆さんが共有していったので、地域の子どもたちにも伝えていきたいね、ということでいくつか活動が展開していきました。

一つは繁多川自治会さんが主催する「豆腐の月」というのが始まって、毎年12月を、ちょっと強引ではあるんですが「トーフ」と呼んでもらって、12月の第一土曜日に繁多川公民館の1階広場で青ヒグ使って石臼を回して、シンメー鍋3つか4つくらい使って、子どもも大人も混じって豆腐の大振る舞いとふかし芋をみんなで食べる会が立ち上がりました。これは毎年残っています。

もう一つが、やはり子どもたちに伝えたいということで、近隣の学校の総合的な学習として入れないだろうかということで、自治会長と繁多川公民館当時の担当者の大城喜江子さんで、一番近隣の識名小学校へ企画を持っていきました。今日配った資料がちょうどその企画書で、当時先生に渡したものです。学校の学習プログラムに参入したいということで、話を持って行って、ちょうど識名小学校今年で3年目になるんですが、4年前の前年度のうちに持って行って次の新しい校長先生に引き継いでくださいと、校長先生にお願いして、無事引き継がれて、4月早々に「引き継がれましたか？」と言いながら挨拶兼ねがね「あたいぐわープロジェクト」の再アピールをして、その年からスタートすることになりました。

最初識名小学校で始まって地域の皆さんと一緒に大豆の植え方、それと生育するときの畑をちょくちょく見に行ったりアドバイスをしながら、収穫した後も脱穀（クルマ棒打ちという）、それと乾燥させて豆腐作りまでだいたい半年くらいかかるんですけども、それを三年生の総合的な学習の時間に定着しつつあります。

やりながら地域の方々が昔の道具も必要じゃないかということで、繁多川公民館が呼びかけたわけではないですが、それぞれができることを携わってくれて、例えばクルマ棒という脱穀する道具を博物館に行って測ってそれに使える木材から中南部に探しに行って乾燥させて復元させた。もしくは、叩くときに敷くニクブクという敷き物があるんですけど、それがないと大豆が破壊されてしまうので、これも編もうということで探したらすでにこれも作っている人がいない。どうしたかということと戦前に作っていた人がいるということで聴き取りに行ってそれを編む装置まで自分たちで復元して、それが今識名小で4クラスと聞いたので、与儀さんという方が4枚完全に復元して、沖縄で一番新しいニクブクとクルマ棒が繁多川公民館にあります。それが現役で使われていくという。「あたいぐわープロジェクト」が始まって地域文化そのものが地域によって見直されていったということがあります。

今現在、識名小学校から始まって真地小学校、松川小学校、寄宮中学校、石田中学校、北部農林高校、よぎ南保育園、いしだ丘保育園、識名児童館などで大豆栽培と豆腐作りが広がっていきました。年間通して人数をざっと数えてみました。児童生徒関わった人数が799名。それから地域住民の方々が325名。これは実質です。延べではなくて。それくらいの方が実際に関わりながら大豆栽培・豆腐作りを通して、地域の方が学校に赴き、学校の生徒が地域に行って一緒に学習を深めていったということがあります。大きく「あたいぐわープロジェクト」はこんな流れです。

もう1枚お配りした資料ですが、公民館から見た学校との連携ってどんな考え方がされているか、表しています。繁多川公民館で今5周年「記念誌」というものを作り初めていて、その中での学校と社会教育の融合するってどういうことなんだろうかということ、書いたものですが。左側が学校教育で謳われていることです。右側が社会教育で謳われていること。これが手をつなぐことで、子どもたちの生きる力が育みますよ、ということが融合事業の一番の成果だと考えています。いくつか、「あたいぐわープロジェクト」以外の事例も載せてあります。また、学校と連携する場合に僕たちが気をつけているよ、ということも載せてあります。1～4と流れを書いています。最初に学校に訪問して資料を持ってこんなことを考えていますよ、ということの説明します。日常の学校行事を確認していきます。何月何日にどんなことをしているんだろうということを確認して、時折学校行事に参加しながら学校の特色や先生方とも顔見ながらそれぞれ意見交換を進めていきます。学校長、それから主任であったりもしくはキーマンになる先生との信頼関係づくりから、ぐっと深まることがあるので、それは気をつけてやっています。

2番目、こちらから情報の提供ということで、「こういうことが今度ありますよ」「先生が前言っていたこと、ここに情報ありました」ということで、普段から情報提供し情報交換できるように考えています。学校の中では聞こえない情報も、さらにもう1つ地域からということで社会教育の目線で情報提供するように気をつけています。やはり楽しくないといけないなと思っているので、楽しくわくわくした感じでいつも「こんなことできたら面白いですね」ということで話をしながらやっています。実際にやると決まったときには、何度も何度も打ち合わせをします。今回どういう目的でやるのか、内容はどんなのか、地域のみなさんとやるというのはどんな意味があるのか、というのを話し合って役割分担を行ったり、予算面、また教師の方が「こんなこと頑張りたい」といったら、全面的に協力していきます。基本的には、学校が主体ですので、先生方が地域の方とこういうことやりたいと言ったときに一番それが叶うようにサポートしていくことになります。

4番目に、基本的には学校の行事と時間を侵さない。教師の時間と要望に合わせる。ものすごい忙しいです、先生方は。これは本当に忙しい。こっちから何度も打ち合わせしましょうとやっていると、先生方はうんざりしてしまいます。ですので、先生方のリズムを非常に大事にします。双方にメリットがあるということを常に意識して、先生方にとっても負担じゃないということを感じてもらいながら進めています。押し付けにならないように。頑張ってくれる先生方を評価します。校長先生に、「あの先生すごい頑張っていましたよ」と。これは久高さん

とっても上手いんですが（笑）、僕は久高さんのそういう姿勢から逆にそういうことを学んでいます。

学校教育と社会教育の連携で、教育目的は本来一緒ですよ、仲間ですよ、ということです。コーディネート役に徹する。主役ではありませんので、ということですね。

とりあえず僕の話はこんな感じです。

久 高：私も実は学校現場のOBなので、琉大教育学部のOBでもあるんですが。これまではずっと退職して13年目になりますが、どちらかという地域に関わるということは、学校側から見た地域であって、自分が住んでいる地域の住民として学校に関わることはほとんどできなかったですね。那覇に住んでいて全部職場は中部でしたから、朝早く出て遅く帰ってきて、繁多川は寝るところだけで、全く地域活動していなかったです。

退職してすぐに教育研究所の教育相談員をやっていた関係もあって、本当に自分が地域人になって活動始めたのは、青ヒグや高アンダーとの出会いなんですね。実は私もうるま市の赤野の出身で実家も豆腐屋なんですが、小学校の四、五年生あたりから釣を持って大人と一緒に畑を耕していました。青ヒグ・高アンダーというのはものすごく頭の中にインプットされていて、ものすごい思い入れがあって、これを公民館でやるということ聞いたこの名前で、震え上がったんです。それで早速私も加わったということなんです。それが「あたいぐわープロジェクト」と関わっているうちに、だんだんだんだん南さんたちの手腕に引き込まれて、これはすごいなあ、自分の居場所があったというふうに感動してやっているところなんです。

私は実際は「かりゆし友の会」というもう一つのボランティアサークルを作りました。真地幼稚園、真地小学校拠点と資料に書いていますが。私の初孫が真地幼稚園に入園して、そのときの主任が宮城あやこ先生で、非常に地域人材の活用がうまい先生で、何か得意なお母さんを見つけたらすぐ手伝ってもらうとかですね。ちょっと何か作れるおじいちゃんがいたら「おじいちゃん、これできない？」と言って、あるいはどこからか情報聞いて「あの人はこれが上手らしいよ」と聞いたらすぐ電話入れて引っ張り込む、というふうにして、5年間の間にだいぶ活用したと思います。それで、うちの孫がいたときにうちの嫁が「うちのおじいちゃんは花つくりが専門よ」と言ったもんだからすぐ呼ばれてやって、それで主任と話しているうちに、色々な方々と個々バラバラに活動してきたことがわかったもんですから、これはぜひ組織しましょうよということで、2007年に今まで関わってきた人全員に声をかけて集めて、会を結成したんです。かりゆし友の会という名前もつけました。早速4月24日に第1回の活動を開始したんですが、元々は3名で始めました。勝手に作って勝手にやってもいけないので応募文書を作っていただいて、これからこういう幼稚園ボランティア活動を始めますのでぜひ参加しませんか、という内容のものを幼稚園の全家庭に配ったんですが、そのチラシで入った人は一人もいなかったんですけれども。やっぱり実際に、関心のある人たちを呼び集めた方がいいなと思います。現在は活動5年目で9名が関わり、途中で3名は仕事の都合でリタイアしましたが、残りの6名は完全に定着して、大変楽しく活動しています。

その活動内容は毎週月曜日朝9時半から12時までなんですが、環境美化です。今、那覇市の全幼稚園で国の予算から一人環境美化委員をシルバー人材センターから派遣して、毎日午前中園庭の美化活動をやっているんですが、朝から子どもたちと一緒に挨拶したり、庭掃き掃除し

たり、私たちが結成した当時はそういう人いせんので、子どもたちと一緒に遊んだりですね。今は私たちの仕事も少し減りましたが、それでも真地幼稚園はものすごく樹木が多くて、放っておくとすぐにうっそうとしてしまうので、枝打ちなんかをしています。それから、子どもたちが朝顔やひまわりの植え付けをしています、その畑作りを手伝っています。園児たちの仕事を奪うんじゃなくて、園児たちのサポートをしています。それから、行事の参加もあります。真地幼稚園は識名園という世界遺産の名園で七五三のお祝いをするんですよ。そこに「かりゆし友の会」のメンバーも参加して、私は三味線できるので三味線を演奏したり、保護者の方々が幕開けの踊りを踊ったり、おじいちゃんたちは水ナリー<sup>ミヅナリー</sup>と言って水を汲んできて「みんな良い子になりますように」という儀式もやります。それから入園式も案内されますし、終了式も案内されますし、そうめん流しとか、そういう行事行事ですね。私の場合は毎年、戦争体験者であるだけにちょうど大戦当時は6歳で幼稚園だったもんですから、その体験談を1つの写真集を紙芝居風にしてやっています。これは園児にあまりむごい戦場の様子ではなく、戦争はあつてはならないということを分かってもらうために。私も父を亡くしたもんですから、そういったことが伝わるように関わってきています。

それから、三年生の総合的な学習での関わりは、識名小学校と1年遅れて始めたんですが、識名小学校の場合は南さんたち公民館の方が中心だったんですが、真地小学校の場合は「かりゆし友の会」が仕事をほとんど引き受けて、なるべく公民館の方々の仕事を緩和したいなということで、道具持ち運びから。しかし、なんといってもこれは公民館がなければ絶対できることじゃないですね。本当に地域だけで小学校三年生の総合的な学習の豆腐作りができるかって言ったら、できないですね。道具とか臼とかクルマ棒打ちとか、それぞれの指導とかについては公民館の指導が必要ですし、道具の管理ですとか。公民館との融合連携がなければ、どうしても小学校の総合的な学習も地域学習も展開できないということは痛感しております。そういうことで豆腐づくりも今年3年目であります。識名小学校は1時間1時間クラスごとに家庭科教室で授業の形でやるんです。ところが真地小学校は識名方式と変えようということで、PTA行事の中とセッティングをして保護者も全部一同に集めて、親子の豆腐作りをするわけです。オープンスペースがあるのでそこでクルマ棒打ちから、臼を1クラス1つずつデモンストレーションしながらやって、教室の中ではお母さん方が持ち寄ったミキサーで豆腐作りをします。非常に盛り上がります。

こういった形で「かりゆし友の会」は活動しているわけですが、自分自身が実際に2校の学校経営をやってきて、校長は幼稚園の園長も兼ねますので、学校経営の上から地域力の活用はとても重要だと思います。草刈とか、草はあつという間に成長しますから。先生方の忙しさというのは僕がよく分かっているの。南さんも学校に入ってみて初めて分かったと言っていたんですが、他からは職場の中身というのはなかなか見えないですね。だから南さんたちが先生方に負担かけないという活字を見るとすごいなと思ったわけです。

そういうことで、やはり自分が一地域人になってみて初めて、「よし、自分にできること一生懸命やろう」と。校長は変わりますが僕は変わりませんので、しかも学校経営のことを隅々まで知りつくしていますので、校長より私の方がずっと真地小学校の様子を知っているかもしれませんよ。(笑)資料にも書いていますが、「園経営と学科経営に口挟んではいけない」と

いうことで徹底しています。「あの先生ダメだね」と批判したりというのは、うちの仲間では一切しない。禁句ですね。そうやっているといつの間にか経験者ですから、先輩ですから、先生方が悩みがあったら相談するようになってきています。できるだけ学校経営や学級経営に支障のないようにして、あくまでも先生方の補助役に回るようにしています。

嘉 数：久高さん、ありがとうございます。

実は今日お呼びしたかった上原弘子校長ですが、私用で参加できなくなってしまいました。私が真地小学校行きて、1時間半くらいお話してきたので、せっかくなので印象に残ったことを掻い摘んでこちらで披露したいと思います。

真地小学校へ来る前は、壺屋小学校で教頭先生をしていたそうなんですけど、その頃地域の方と焼き物祭りなどをしたそうなんですけど、その頃培ったことを今真地小学校でも活かしているんじゃないかなと思いました。真地小学校に来て2年目です。校長先生曰く、「学校とは地域に浮かぶ船である。」とおっしゃっています。どういう意味かと言うと、おそらく地域が荒れると学校は転覆するという意味だと思います。また、学校も外に出て行かなければいけないとおっしゃっていました。校長として真地小学校に就任したとき、地域に出向いて挨拶回りをしたそうです。普通、挨拶回りって1回やれば終わりなんですけど、この方は徹底して、校門出て右側にガス会社があるんですがそこに挨拶に行ったら、今ではガス会社の人が朝の挨拶で校門前に立っているそうです。というわけで、この校長先生自身も面白い方だなと思いました。

周りにキーパーソンになる方がいらっしゃるということで、何名か伺いました。那覇市の自治会連合会会長でなおかつ民生委員もしていらっしゃる方で真地団地の会長である眞榮城さんもすごい人で、真地団地も高齢化が進んでいて会長自身も小学校との交わりで団地の活性化を謳っていらっしゃると思います。

続いて、2代目のPTA会長で18年前からPTCAをやっている宮城さん。PTCAというと、新都心にある銘苅小学校でも行なっているんですが、真地小学校では18年前からやっているんですよということでした。どんな感じですか？と聞いたら、PTAにも目を光らせています、とおっしゃっていました。すごい存在感のある人だと思います。この方どんなことをしているかというと、識名園を開放してほしいと市の文化財課と掛け合って、真地小学校五年生と十三祝いをしたり。識名園の正門がどこにあるか分かりますか？観光バスが入るところではなくて、上間交差点降りる下のスージにあるんですが、僕も開いているところ見たことないんですが、その正門を開けて開催したそうです。とにかくすごい行動力のある方です。識名園では色々な形で地域と学校の連携が見られて、すごい印象に残りました。

もちろん、一番のキーパーソンで挙げていただいたのが今回お話いただいた久高さんです。

他にも真地小学校では旗頭「ちゅらばた会」をやっているんですが、那覇市制90周年の時に披露したそうです。

学校内のキーパーソンは、地域連携コーディネーターの仲本先生という方を挙げていただきました。仲本先生という方が地域と学校の連携をしているそうです。

それから、地域の方が学校に来て「刻字クラブ」などを子どもたちに教えているそうです。

あと、学習支援で学生ボランティアをすごい活用しているみたいで、近くの沖縄大学や沖縄女子短期大学、特に沖縄大学は単位になるので学生が積極的に入っているそうです。



最後に、学校前に大吉という居酒屋があるんですが、そこが第二会議室になっているそうです。(笑)色々と宴会されるんですかと聞いたら、新人職員歓迎会などをやるそうです。PTAの宮城さんや「かりゆし友の会」も参加するそうです。新しく赴任してきた教師の方を歓迎する会です。

また、年に1回ですが、地域連絡会といって、真地小学校周辺の各自治会や今まで僕が挙げたキーパーソンをお呼びして宴会するそうです。

真地小学校というのは市内では新しい学校なんです。回りに団地も多く、新興住宅地で、僕の印象としては、その中で地域とどうやって連携しているのか、まとまっているのか、という思いで行って見たら、僕の予想を覆してキーパーソンだらけというか。ものすごい積極的な人が多い。真地小学校は次のレベルにあると思います。今言ったように、居酒屋大吉が第二会議室になっていたり、地域の方々が学校と交わることで、地域のほうの変化が生まれている途中だと思います。

南さんにお伺いしたいのですが、「すぐりむん」についてなんですが。僕すごいなと思ったのは、地域の人材バンクみたいなものに今、繁多川公民館がなりつつあるんですね。前回、南風原の事例でもあったんですがその時コーディネーターの儀間さんという方がチラシ1万枚配っても3名しか集まらなかったと。しかも、この3名は使いものにならなかったと。どうしたかということ、区長さんをお願いしたら人材を紹介してくれたと。この人材を紹介してくれるような地域に根を張った地域に影響力のある人って、やっぱり都市部には少ないんじゃないですか。その肩代わりを公民館が人材バンクという形で受け皿みたいな、ものすごい興味深い事例だったので、お伺いしたい。

南 : 人材バンクを最初作ろうといって始めたわけではなくて、「あたいぐわープロジェクト」の一連の流れの中にあります。地域で地域文化を見直して、それぞれが家庭の中で在来大豆を作って豆腐作りに関わって、地域が文化復興の道具とか、それぞれ一人ひとりが得意分野で関わっていくんですね。そうすることでその方々が元気になってきて、顔とどんなことができるということがどんどん浮かび上がってくるわけです。それは「あたいぐわープロジェクト」以外でもです。久高さんもそうですし、そういった方々が継続して、これからも地域の何かしらの活動をそれぞれができるように認定することで、地域のみなさんもお互いを認め合ってさらにやりやすくなるんじゃないか。お金は何も発生しませんが、認定証という一枚のものを自治会と繁多川公民館と「NPO 法人なはまちづくりネット」の名前で。本当に遊び心ですので、どんなものがあるのかというと、「まーさむんつくやー」と言って美味しいものを色々作ってくれる方、「豆腐つくやーすぐりむん」、それから地域でボランティアで子どもたちに色々教えてくれる方、テニスなら「テニスならわさーすぐりむん」とか、空手や三味線など、それから地域の歌を作詞した人「歌詩じゅくいすぐりむん」。「すぐりむん」が先にあるんじゃなくて、その人が先にあって、その人に合う「すぐりむん」をうちなーぐちで作る。第3回目までが終わって、55名が地域の中で大活躍しています。

久高 : 私は「はるさーすぐりむん」です。認定証を持ってこようと思ったけど、忘れてしまいました。

南 : 地域の自治会長さんとも話している中で、認定している方々をゆくゆくは学校ともつなげたいということは話し合いの中で出てきています。具体的にどのように繋げていくかはこれからな

んですけれども、認定しているみなさん、何らかの行事や公民館講座で活躍しているところです。

嘉 数：続いて久高さんにお伺いしたいのですが、久高さんもこの繁多川公民館の戦略にやられちゃった方なんです、真地小学校でボランティアする中で逆に地域の方との結びつきも以前と変わってきたと思うんですよ。色々と仲間が増えてきたでしょうし、これまでは中部と行ったり来たり生活だったとおっしゃっていたのですが、この違いを、ご自分でも実感している範囲内でよろしいので教えてください。

久 高：これはですね、公民館があつて僕はやつと繁多川んちゅになれたと。今までずっと具志川んちゅだったんですね。公民館活動に入って初めて自治会活動とのつながりで、僕は繁多川んちゅになったなという感じ。というのは、こういう活動をしていると、色んな人と会う。私はこの年になると忘れてしまうんですが、初めて会う人が、例えば嘉数さんなんかでもどこかで会々と、「この前会いましたよね、久高さん」というふうに声かけてくれる。こういうふうにしてどんどん地域が広がっていく。それから繁多川祭りにもかり出されます。準備期間から片づけまで3日かかるんですが、楽しくてしょうがない。そういう感じですね。それから、真地小学校での「かりゆし友の会」の活動は4、5年になりますから、今の五年生が幼稚園の頃からやっていますから、行くと子どもたちが分かるわけです。「久高のおじいちゃん、さようなら」とかですね。なんかこうエネルギーをもらいに行くみたいで。私たち「かりゆし友の会」は、学校のためというよりも自分たちの生きがい求めて頑張っているんだということです。午前中の活動が終わると幼稚園の職員室で必ず主任がコーヒーとお菓子を出してくれるんです。幼稚園の先生方、美人が多くて、私たちの平均年齢70歳で一番上が77歳ですから、ここで幼稚園の主任も交えてゆんたくするわけです。できるだけうちな一口でやろうな、と。方言交えての語りは非常に楽しいわけですよ。笑いの絶えない30分間。11時半に終わって12時までですね。非常に若返ったのではないかなあ、と思います。（笑）

嘉 数：僕が上原校長と話しているときに感じたことがあつて、学校が学び舎で子どもたちも育つんだけど、地域住民も育つんだな、と。今の言葉聞いてすごくいいなと思いました。学校って地域の大人が子どもたちのために何かしてあげようって、何か尽くす側にあるんですが、実は自分たちも何か与えられているということを強く感じました。

今日はオープン形式で人数も少ないですし、このまま座談会形式で話し合った方がいいのかなと思います。

前 城：繁多川の取り組みは大城喜江子さんから聞いており、またテレビ特集も見ていて、昔の小道具などを作って持ってくるおじいちゃんとかも見ましたから、オーバーラップして聞いていました。で、実際に影響をうけた地域が南風原町にもあり、大豆も植えています。まだ子どもたちを絡めた取り組みはしていませんが、いずれやってみたいと思っています。ただ、繁多川は住民からの聞き取りのプロセスで地域の宝として豆腐があると気づき、取り組みを始めたので、私たちがやろうと思っても真似事でしかないだろうなと思っています。

それで、お二人に共通するのは、やはり学校や先生の立ち位置になっているということなんです。僕も翔南小学校で経験してメンバーに言うのは、「学校の先生たちの邪魔だけはするなよ」ということです。久高さんの言う通り、先生の文句を言ったら終わりですよ。文句とか自分のエゴを言ったら終わりですよ。南さんの言うように、「双方にメリットがある」というのは信頼関係です。信頼関係作るのがとっても大事で、これを作ってしまうとどんな展開でもできるんですけども、その時に事業をやるとなったら先生のカリキュラムを主体にして、そこでどんな授業ができるかということのを地道にやっていって入りこんでいくんですよ。これを分かっている人が地域にいる、いないで全然違います。

前回の儀間さんという南風原の地域コーディネーターも、先生方との信頼関係を半年から1年間かけてやって、どんどん入り込んでいっているんです。南さんのような役割をしています。行政が動くか、久高さんみたいな人がいるか。地域にはそういう人がいるんですよ。いない地域はないと思います。すでに素地はできているので、あとは経験していけばいいんだなと思いました。久高さんの存在を見て、僕は南風原ではあの人がいるや！と思いました。あの人がつなげばいいやと。今日はすごくメリットがありました。

今日お聞きしたのは、まず質問項目(2)の地域と関わりを作った理由、理念についてです。学校には入れ代わり立ち代わり、子どもたちが出て行って入ってきます。地域の人たちは人材の宝庫だと思います。学校とみなさんが関わっていなければ、今みたいにもっと広がっていない。公民館講座だけでは、もちろんそれだけでも効果はあるんですが、広がり、面積が違うし。

次に質問項目(3)ですが、地域の方々は学校の決定にどう関わっていくか、とあるんですが、南さんや久高さんが、学校の中にどう関わっていくかについては、見てすぐ分かりました。つまり、さきほどおっしゃっていた支援者になるということがまとめられれば、この質問に対する参考になると思います。

質問項目(4)ですが、学校教育の中に地域の方々をどのように納得させたかとありますが、これ、納得させたかどうかじゃないんですよ。これはおかしい話だなと思っていて、協力関係、信頼関係を作れば、先生方の方から逆にこちらに来る。さきほど久高さんおっしゃっていた悩み事の相談に来るよ、と。これさえ来ればオー！って感じですよ。この質問は逆の目線から見ているなと僕らも反省しているんですが、地域のレベルが高ければ、自然と学校も入っていけるんだなと分かったので、こういうことを整理していけば面白いと思いました。

また南さんから説明のあった理由・理念、これも分かっているかいらないかで全然違う。これがなくて、行け行けでやっていたら絶対失敗すると思います。全ての解答が今日見えてきたかな、という感じです。しかも、那覇です。離島や町村は色んな事例が出てくるんですが、那覇でどうなっているのかということが分かりました。

久 高：私は泡瀬小学校の初代校長なんです。「地域に根ざした学校経営」を目標に学校づくりを始めました。地域に根ざした学校をつくるわけですから、この地域をどう理解して、どういうふうな地域に根を下ろさせるかということで、半年間経営計画に取り組みました。地域をどう活かすかということは学校にとってとても大事だろうと思っています。

それから、地域に根ざした学校を作るということは、学校というのは校長が変われば学校が変わるという言葉があるんです。継続していくためには、どうしても地域と関わらせた方がいい

い。身近な例で言えば、真地小学校には創立当初、ミニ博物館がありました。教室1つを使って。ところがこれはほとんど運営されていない。今の校長先生は一生懸命なものですから、これをなんとかしたいと相談に来るわけです。これを長続きさせるには、地域にミニ博物館運営委員を設置することですよ、と申し上げた。設置すればそのまま継続できる。学校経営の中で、校長の理念でできる方策は校長の理念、大きな理念は変えてはいけないんでしょうけど、地域に根ざすためには、そういう変えてはいけない、地域と長続きするためにはPTCAみたいなものを作って、校長が変わってもいつでも引き継がれるというものを作ったほうがいいと思います。

南 : 久高さんと共通するところでいったら、学校を向いたときに、地域の方々が逆に手を結びやすいということがすごいあります。資料の方に「学校教育・社会教育融合」という理念がありますが、子どもたちを間に入れることで地域の方々がぐっと同じところに目を向く、というのは地域づくりの中では吸引力を持っているなと感じます。やはり自分の孫がいたりですか。

「あたいぐわあプロジェクト」も実はさきほど挙げた小学校全てに繁多川地区の人が出向いて行くというのが構想としてあるのではなく、その地域の方々が学校をサポートしていくということを基本的にしています。

その学校の一番良い事例が真地小学校なんですけど、地域に人がいてしかもそれが組織化されていて、学校に常に定期的に出向いている、顔を出している。子どもたちがいることで地域の方々が目を向けて、それを学習に取り入れていくことで地域文化という言葉が定着していくんですね。公民館の一発花火で「面白かったね」だけで終わるんじゃなくて、地域文化として定着していくことで、さらに聴き取り調査に関わった方々以外の、その周りの方々までが、「繁多川といえば豆腐だよね」「昔作ったことあるさ」という人たちが、人づて、人づて、人づて、人づてを通じて輪が広がっていきます。この学校の子どもたちは自分たちが育てているんだ、という目線がどんどん広がっていくんです。例えば、真地小学校だったら久高さんですけど、識名小学校では与儀さんとか板良敷さんとか、「誰々のおじいちゃん」だとか、地域の人たちの名前を子どもたちが知っている状態が起こってくるんですね。そういう輪が少しずつ広がっていくということが、僕は波及効果として大事なんじゃないかと思っています。そしてそれが継続していく一つのことでありますし、地域で残していけば、簡単に言ってしまうと繁多川公民館はNPOの委託を外れる可能性もあるわけです。外れてしまったときに、じゃあその地域の文化の活動がゼロになるのかといえば、地域にいくらか置いていけば、NPOが少しサポートしたり、もしくは次に引き受けたところに上手く引きつければそのまま定着していくということもあるんですね。なので、継続してそれが定着していくことは、学校と関わることの意味として大きいなと思っています。やっていくうちに今度は地域の方々が大事にしていることなので、波及効果が生まれていく。「地域の中のこれはどうする？」ということが、もっと出てくるんじゃないかなと感じます。

前 城 : 今の中で、久高さんの所属する「かりゆし友の会」の存在は大きいですね。

もう一つ長い目で見たときに、前回南風原の事例でもお話したんですけど、<sup>お</sup>字の管理する組織が入っていくときにこういう取り組みがないと、みんなカンフル剂的に作業するんですがそうではなくて、漢方薬的に時間をかけて信頼を高めていって、地域の人が絡んでいく、保護者

の方が絡んでいく。そうするとたぶん 20 年後の自治会の担い手は育っていくんだろうな、と思います。長期戦略で持っていくということが大事だと思います。

私は、翔南小学校の PTA 会長を 3 年して、今は引き継いで副会長で、今年で卒業なんです。さきほどの「すぐりむん」みたいな感じで、小学校に子どもが通ってなくても PTA の賛助会員制度を作って、似たようなことを動かしているんです。これは私が卒業してから本格的に可動するつもりで、来年から本格可動です。さきほど私が「久高さんのような役割できる人がいる」と言ったんですが、その方を入れれば僕たち事務局も大丈夫だと思ったんですよ。

南 : 「あたいぐわープロジェクト」が何年間か継続しだして、いくつかの小中学校で開始し始めてから初めてできた一つの軸があります。これは今年度委託を取る前に職員全員でワークショップをして出てきた考えで、「これはこれからやろう！」ということで、まさに今前城さんが言ったようなことなんです。継続したときに地域の人たちがどういうふうに自治組織、市民力として、リーダーとして関わっていけるか、ということから考えた軸を今年実践しようと思っています。

それは、繁多川公民館は「あたいぐわープロジェクト」以外にもいくつか事業を行なっていて、少なくとも地域の色々な自治会の活動が普段からあってそれに関わっている人たちがいると思うんですけど、近隣の小学校三年生が関わって、その父母、それからおじいちゃんが間違いなく全員関わるので、顔を会わせ公民館活動も分かるし、地域活動にも触れるんですね。その後、子ども会という活動で、子どもたちは継続して公民館となんらかの活動を開始して、お母さんたちはひょっとしたら婦人会に入るかもしれないし、また次年度の三年生の豆腐づくりのお手伝いに戻ってくれるかもしれない。連絡先を聞いているところもあるので。また、他の講座にその人たちのいくつかのキーパーソン、分かるお母さんたち、引っ張ってきたお母さんたちの顔をつないでいたものを、また講座でつかんで、他の講座で活動を展開する。家庭教育学級などで主役として盛り込む、もしかしたら「すぐりむん」として認定する。ということを経験を追ってあらゆる講座で関わっていき続けることで、忙しい人はもちろん関わりづらいと思うんですけど、地域活動もしくは自分の生きがいとして関われるなと思ったときに、いつでも公民館となんらかの形で、もしくは地域社会となんらかの形で関われるっていう道を意識して僕らでつないでいこう、ということを考えていて、継続していくことで幅広い地域のリーダーが養成されるんじゃないかと考えています。

なんでそう思ったかという、「あたいぐわープロジェクト」が何年間か継続してきたから見通せる軸であったことと、もう一つは豆腐作りという地域の文化をやったときに、今の教えている 70 代、80 代の方からもう少し下の世代に引き継いでいけないかな、ということで公民館としては意識的にやろうと思っているところです。話を聞いていて、「長い目で地域にとって」と言ったときに、確かにそうだなと思いました。

前 城 : 地域文化に定着していったときに、久高さんがおっしゃった「校長が変わっても、変わらないように」というのは、地域の方が作っていくということですね。

久 高 : 特に、おじいちゃんからすると、孫は子どもより可愛いというのは本当なんですね。(笑)

孫のことになるともう目が光る。学校に目を光らせるんじゃなくて、孫のためには何でもやる

ぞ、という気持ちでいるので、上手くその心理を利用すると、前城さん、どんどん広がると思いますよ。

それから、昔からよく言われてきたことですが、昔は敷居の高いのが警察でした。2番が学校。今は逆転して、敷居が一番高いのは学校だと。それは自分たちは中にいるので分かりませんが、外からはよく分かります。「かりゆし友の会」を作って、小学校の先生方がなかなか僕らのことを受け入れにくい。道で会っても挨拶してくれないとか、校内でも1、2年はあまり解け込まないんですが、私たちの活動がどんどん入ってきて子どもたちが私たちの話を担任にするようになって、今ではどこで会ってもどの先生に会っても「ご苦労様」と挨拶します。「こんにちは」という言葉より「ご苦労様」という感じなんです。そういうことを頭に入れて、学校の職員は割かし排他的なんです。それは、私も含めてまずかったな、と思うんですが。でも入っていくと、心開けば融合できますので、しかしそういうことを頭に入れて入っていく。

「あいや、くの学校や難しっさ！」とか「いった一や、行っても挨拶しないのに！」と最初から言ってしまうと、相手もますます閉ざしますので、学校には敷居の高い先生がいて割かし排他的だということを覚えながら、それをこじ開けてしまえばいいんじゃないかなと思います。

前 城：先生たちとても忙しいんですね。

久 高：外から見ては分かりませんが、本当に忙しいですよ。

前 城：分かっただけでお互い気持ちが分かりますよね。

久 高：例えば、そういうことが分かってくるとこういうことができるようになります。三年生の教材にモンシロチョウが孵化する教材があるんですが、わざわざキャベツ植えているのに、今年はぜんぜん虫がつかない。今年は特に植物異変なんです。天候が1ヶ月遅れで全部遅れてきます。豆にも影響でています。それで、キャベツに虫がつかない。三年生の先生は私に聞くわけです。私はまた「かりゆし友の会」を引き連れて、南風原のキャベツ畑に虫を探しに行くわけです。収穫した後に残ったキャベツから虫を拾ってきて学校に届けて、そして飼育箱に各3クラスに分ける。そして、ちゃんと孵化したということがあります。先生方は大変忙しくてそんなことする暇ないわけです。しかし蝶が飛んでこない、その授業終わり。そういうことを聞くと、僕らが時間あるじゃないかと言って、南風原中を周って虫をたくさん取ってきて飼育箱に置いて、子どもたちに蝶になるまでの観察をさせた、ということがあります。そういうことの繰り返し信頼関係になってくるんじゃないかなと思います。

嘉 数：南さんは、いくつかの学校を見て回られたと思うんですが、調査項目5番目で「どのような地域や自治会のある地域でこのような関わりは作れるのか。作れないところはあるのか。」という質問なんです。

南：そうですね。基本的には、「かりゆし友の会」みたいな地域の人たちがほとんどの学校にいらっしやいます。4～5名か、もしくはここまで深くは入ってないですけど、週に1回か2回関わっていて、その人たちは自治会とは特に関係がなかったりもします。それが、1年目では全く分かりません。2、3年してきて、その方々と学校との関係、その年の校長先生の認識、自治会活動の今の状況と合わせながら学校ごとに対応を変えなければいけないということがあります。

特に、自治会に関しては子ども会に力を入れていて、ゆとりがあるかないかでも全然違うし、自治会長さん一人で切り盛りしているか、もしくは自治会長さんが超高齢化しているか、その様子でこの動きどこにメインを持っていくかわ変わってきます。自治会長がちょうどやろうと思っているんだったら、一気に話を持って行って協力関係を依頼できるんですけど、そうじゃない場合は地域のそういうボランティア団体に2～3年後につなげられるようにしながらやっていきます。「あたいぐわあプロジェクト」関係の学校に最寄の人たち、繁多川だけどもう道あと2つ行けば違う学校の区域、という人たちに最初協力を依頼して、人づてで人を呼び込んでもらう仕組みづくりを進めていきます。そうでなければ、1年目に入ってきてくれた保護者のおじいちゃん・おばあちゃんを引き続きつかまえておくという感じでスタートしていきます。これは僕たち試行錯誤の段階で、学校ごとに同じようにはできないということは間違いないと思います。

嘉 数：久高さんにお聞きしたいのですが、その地域の地域文化になるかならないかは、後継者がいるかないかだと思うんです。以前、久高さんのお話の中で、わざと豆腐作りをある方に任せる、ということがありましたが、これも意識して続いてほしいという意味なんですか？

久 高：そうですね。私たち組織は、「80歳までは現役で！」というのがお互いの合言葉です。80歳すぎたら、特別顧問会員になる。この「かりゆし友の会」は永遠に続くんだということで、いつでもこの合言葉を言っています。その代わり、「あの会は久高がやっているんじゃないか」という手柄を立てるんじゃなくて、美味しいところ取りの組織では全く駄目で、一人ひとりに準じてみんな同じレベルで仕事に関わるわけです。設計士がいたり、元々農業ばかりやっていた人がいたり、大工がいたりとか、高校の教員とか、6人違うわけです。

そういうことで、豆腐作りの<sup>ひづ</sup>婿がいるので、「真地小学校の豆腐作りについては、豆作りとクルマン棒までは僕が担当で、豆腐作りのことは全部責任持ってやりなさいね」と言ってその人にさんに任せる。野菜作りについては稲福さんというベテラン中のベテランがいますので、この人に任せる。土木作業については元土木作業をしていた人がいますので、その人を通して仕事をしてもらう。私はパイプ役だけでいいんじゃないかというわけで、今代表をやっています。そういうことは非常に大事だなと感じています。一人ひとりにそのポジションを与えて、「かりゆし友の会」で生き活きと動けるんだという居場所を作ってあげないと、リーダーが自分一人だけで威張ってばかりではどうにもならないと思います。

嘉 数：地域づくりには、リーダーも必要ですけども、もっと必要なのがコーディネーターではないかなと今聞いていて思いました。

久 高：そうですね。必要だと思います。

前 城：どこの地域でもできるんですよ。俯瞰的に見れるかどうかですね。その時々場所場所で、人材の凸凹がありますから、その凸凹の人材をどう集めて活用してプロジェクトしていくかですよ。

南さんの教えてほしいんですが、社会教育的な勉強はどこで学びましたか？

南：だいぶ古くから遡ってしまうと、那覇市の子ども会活動を小学校のときに活発にやっていたので、那覇はジュニアリーダーという中学、高校まで、しつこいくらいやっていたということがあります。

前 城：今おいくつですか？

南：29歳です。大学では内地ですが「環境社会学」をやっていました。まちづくりと関係のある分野で、地域地域で自立して意思を持った地域が成り立たないと、周りには基地もありますし、自己決定権をもっとできるような地域になるといいなと思って帰ってきたので、今すごく関係のある仕事をさせてもらっているなと思っています。

前 城：実践と理論がバランスよくあるんですね、南さんは。実践だけやっている人はまとめきれない、理論だけやっている人は毛嫌いされるんですね。

久 高：僕から見てもすごいなと思うんです。信頼関係です。これは南に聞けば大丈夫だ、南が言うように動けば大丈夫だ、と。お互い本当にツーカーになっています。

南：それはお互いですね。僕もそうです。

あとで紹介しようと思っていたんですが、「あたいぐわー手づくり市」という市を東北の震災後に行ないました。震災後、地域のみなさんの立ち話で「自分たちも畑があって、あたいぐわープロジェクトやっているけど、何かできることないかな。」と。テレビを眺めるだけで、戦争を体験した方々からしたら居ても立ってもいられないわけです。そういう話があって、「そうですね。何ができますかね。畑があるから何か持ち寄って支援金づくりとかですかね。」と言って、話を聞いていてこれをどう結べるかなと思って、地域の方々が同じような想いでいるのか最初分からなかったのが久高さんにも相談して、「こんな声がありますがどう思いますか。」と聞いたら、「みんな集めましょう。」と。「あたいぐわープロジェクト」のみなさん十何名が集まって、何かしようということは決まっていたんですが、では野菜があるかと言ったら意外となかったんですね。野菜がないけど何かやろう、ということで、みなさんそれぞれ用意できるもの「こういったものがある。」「ああいったものがある。」と。「すぐりむん」がいるので、「すぐりむん」の技術で美味しいものを作ったりという手づくり市をしました。手づくり市をやりながら、自分たちの住んでいる地域の防災も考えるきっかけにしようと、急ピッチで準備して、年度が変わる直前に開催しました。

公民館講座からスタートしたものではあるんですが、本当に地域のことを自分たちで考えるというふうに動き出しているな、というので感動しました。なんとか、集まったお金も岩手県宮古市に職員通じて手渡してきて、報告会も行なって、秋にもう1度何かしらのサポートを継続してやろうかと今構想を練っています。

また、「あたいぐわープロジェクト」も自主運営化、組織化しようという声が手づくり市のときに出て、実は、先々週くらいの会議で会長久高さん、事務局は僕ということで、これまでの公民館とのパイプも持ちながら、自主的に集まりを持ち、たまには夜お酒も飲みながらやりたいねという感じでスタートしたところです。

久 高：話があったときに、まずはやろうじゃないかと。いつも前向き。私はいつもそうなんです。行動起こさないと始まらない。できるかね、ではなくて、やろうじゃないか。失敗したからってどうってことないじゃないかと。やってみたら、とても楽しくてね。野菜を持ち寄って、しかも完売しました。あとから注文もあって、苗なんかもあげました。

嘉 数：食つながりやで、新聞で読んだんですが、地域の各家々回って食材等をもらってくるという。



南 : それも講座の一環で、夏休みに2泊3日のサバイバルキャンプというのをやるんですが、でも実際には繁多川公民館広場でテント張るのでそんなにサバイバルではないです。(笑)ただ、クーラーも使わない、お菓子も食べない、またその年々でテーマを変えるんですが、その年は前年度に子どもたちの食べ物の扱い方や食に関することがどこか抜けているのかなということ がしばしば見られました。例えばカレーを作るとき、子どもたちはジャガイモ、人参、玉ねぎ、肉がないと作れないと思っているんです。そうじゃなくてもすでにある材料を使ってカレーというのはできるんですね。自分たちでもうちちょっと考える仕組みづくりをしようと、「あたいぐわープロジェクト」の人の家に歩いて野菜をもらいにいって、自分たちで収穫して、もらったものだけでご飯を食べる、というプログラムを盛り込みました。なので、みんな「この野菜何?」と。モロヘイヤとか子どもたちよく分からないんです。地域の人たちに聞いて、どうやって食べたら美味しいよ、と聞いて帰ってくるんですけど、面白かったです。ナスをもらってきて、ナスをカレーに入れようと思って切っているとナスの種が出てきて、子どもたちは種は取らないといけないと思っているんですね。ナスの小さい種を一生懸命取っているんです。(笑)おう!すごいな、と思って。僕から言うのも何なんで、ジュニアリーダーの中学生にこそっと「ナスの種取っているよ。そのまま放っておいてもいいし、教えてあげてもいいし。」(笑)

中 村 : 地域の人たちと触れ合うことで、目に見える子どもたちの変化というのはありますか?

南 : はい、2つ紹介します。

1つは、「豆腐の月」が始まったとさきほどお話しましたが、そのときに「飛び出せ市長室」ということで那覇市の翁長市長に来てもらったんですが、石臼を回したときに出が悪かったんですよ。そこで地域の与儀さんという方が慌てて石臼をひっくり返して切り込みをいれたら、よく出るようになった。それを見て与儀さんのお孫さんも参加していたのでお孫さんが「おじいちゃんすごい!」と言ったんです。それをちょうど那覇市長も聞いていて、「孫からおじいちゃんすごいという言葉が聞けるこのような地域づくりは、これは非常にすごい。」とおっしゃって、僕もそうだなと思いました。おじいちゃん、おばあちゃんすごい、という子どもたちの言葉が聞けるというのはすごいなと思いました。

それともう1つは、今年の真地小学校の豆腐作りが終わったあとの学習発表会があるんですが、これは2人1組になって新聞を作って学年で発表するんですが、そのときの1番最後の子だったか、発表していたことが忘れられないんですけど、その子は「大豆が今、ここにあることがすごいことだ。」と言ったんです。どういうことかということ、自分たちで種を蒔いているので、3ヶ月くらいでできるということを分かっているし、古い豆は発芽しないということを知っているんですね。ということは、この種が今ここにあるということは、毎年誰かがどこかで蒔いてきたんだということを感じて分かっているんですね。インターネットで調べているので、鎌倉時代に大豆が中国から入ってきて仏教と共に入ってきたという歴史も学習しているわけです。ということは、その何百年、もしくは何千年という時間、誰かがこの種を蒔いてきてそれを食べてきて、食材として使ってきたという歴史をその子は肌で感じたんですよ。そのことを小学校3年生の子が言うということに僕はビックリして、この学習効果は、これはそう簡単にただ本を読むとか黒板に向かっているだけでは分からないなと思いました。これも

久高さんという人が地域に何度も顔を出しているから、地域文化としてその子は感じたんだと思うんです。すごい大きな効果だと思いました。感動しました。

久 高：真地小学校の三年生の最後の締めくくりは、さきほどいった新聞を2人1組で作り、その報告会をするわけですが、もうすごい内容が出てくるんです。その中で、クルマ棒打ちのときに、一枝に70粒くらいあるんですが手で剥くと大変なんです。一度実際に剥かせてみたら大変だということが分かるので、それで昔の人は考えてクルマ棒打ちをする。そこで私が「では、クルマ棒よりもっといい機械を発明できたらいいね。」と言ったら、三年生の2人がサッと脱穀機を考案して図を描いて私に持ってきたんです。この2人には発明賞という賞状をあげました。

また、最後には「かりゆし友の会」へということで、必ず子どもたちから写真入りの感想文をもらいます。幼稚園児からもおじいちゃんたちへということで、心こもったものをもらう。私たちが子どもたちからもらって大変嬉しいが、子どもたちもおじいちゃんたちがこんなことしてくれたんだというお礼の心を言葉にしておじいちゃんたちにあげるとい、お互いの相乗効果をお互い交流し合っています。

中 村：双方にメリットがある、とさきほどおっしゃっていたんですが、こういう子どもの姿を地域の人が見たり、また先生たちが見ることで、先生たちも「すごい！子どもたち成長している！」ということを感じて、いろんな立場の人がお互いを認め合ったり学び合ったりしているんですね。

南：真地小学校は久高さんたちが入っていつているということもあって、細かなケアができているというか子どもたちの学習に合わせて展開ができるので、先生方の地域の方々との接し方が変わっていくと思うんです。赴任した別の先で、そのことを知っている先生がまた一人増えたと思うだけで、僕はすごい心強いです。たまたま去年、真地小学校の三年生の担任だった先生が識名小学校六年生に赴任してきて、今また別の仕事でつながりができています。そういう意味でも、先生方とのつながりが那覇市のあちこちでできていくんだと、非常に心強いことだし、これもすごい強い効果だなと思っています。

前 城：種蒔きですね。久高さんが蒔いてきた種が今このように芽を出している。久高さん今おいくつですか？80まではできますよね。

久 高：はい。（笑）今年で73歳になりました。

前 城：それからもう1つ聞きたいんですが、カンダバーも植えていますよね？それはどのようにされていますか？

久 高：カンダバーは幼稚園児に体験させています。今までは、私たちが作る前までは、よその畑にバスに乗って芋ほり体験をさせに行っていたのですが、ここに畑があるんじゃないですかと言うことで、それまで30坪くらいの畑が2つあったんですが全く使わないので、それを私たちおじいちゃんがパッと作って畑にして、ここで子どもたちにカズラ植えから水かけ、観察、芋掘りまでをやっています。この畑では9月には小学生がジャガイモも植えないといけないので、4月に入園してきた幼稚園児は早めに植えないと芋ほりができない。そこで、私が前もって100近くのポットにカズラを植えて根を張らせておいて、幼稚園児にこの根が芋になるんだよということを教えて、それから植え替えをさせています。今すくすくと育っています。

それから、幼稚園児にも青ヒグを植えさせています。幼小連携と言うんですが、幼稚園児が作った青ヒグを、小学校三年生のクルマン棒打ちのときにプレゼントするんです。「お兄ちゃん、お姉ちゃん、私たちが作った青ヒグを使ってください」と三年生と対面させてプレゼントして、またこの子たちが三年生になったときは豆腐作りするんだよ、ということも先生方と一緒にになってみんなにお話して、そういう連携もしています。幼稚園のときから大豆作りをして、三年生になったら本格的な大豆作り、観察をして、クルマ棒打ちまで行なって、そうやって夢を持たせながらやっています。

佐 藤：小学校三年生までは総合的な学習の時間でこういった関わりをするということでしたが、その学年の次の学年からこの子たちが成長していく中では、何か参加できる活動の場があるんでしょうか？どのような形なんでしょうか？

南：繁多川公民館の場合は色んな講座がありますので、三年生に関わらず、さきほども紹介した夏のサバイバルキャンプ、それからサマースクールでの出張講座、それから夏休み特別企画として繁多川公民館の42サークルが主催となって、いつもやっていることを地域の子どもたちに還元しようと。もともと社会教育法で謳われていることなんですけど、公民館はカルチャースクールに化けちゃっているところがあって、ただ部屋を貸すだけというイメージが強くなってきていて。本来は違いますので、本来は戦後の日本を復興させるための施設として建っていますので、そういったことを思い直しながらきっかけづくりとしてやっています。夏休みは6つか7つのサークルさんに主催してもらい、毎週必ず何かの習い事は行なっています。

また、識名小学校では、県が勧めるグッジョブ運動の関係で六年生が総合的な学習の時間に「ジョブシャドウイング」という活動を始めています。今年で2年目です。規模が大掛かりになってしまうので課題が多い取り組みだとは感じているんですが、地域の職場、働いている人までも刺激しながら働くことを考えようとスタートしています。那覇市では今年、若狭小学校と識名小学校が実施する予定です。そういうことも年間通して関わっています。

佐 藤：前回お話を聞いた事例では高学年になると子どもたちが部活動に行ってしまう月に1回の地域活動が難しいとおっしゃっていました。こちらではその辺がどのようになっているのかなと思って聞いてみました。

南：中学校になるとますますそうですよね。

繁多川公民館ではこちらからよく小学校に出向くことで、子どもたちが、特に近所の子たちが公民館に足を運んでくれるようになります。2階の窓口まで来て「セミを捕まえようよ」とか「一緒に遊ぼう」とか、宿題をやったり、ただなぜか出勤簿のように名前だけ書いて帰る子もいるんですが。（笑）とにかく顔を見せるということが、向こうも安心なんだと思います。なぜか子どもが多い公民館。

たまに僕たちも、色んな家庭事情があることも分かるので、この子お父さんいないんだとか、お昼ごはん食べれないんだということとは分かるんですね。「お昼時間だから帰ろうよ」と言っても帰らない。「お家に帰ってもご飯ない」と言う。あとで民生委員さんにも相談しますが、でも、「じゃあ、屋上に行って一緒に手伝ってくれ。草かき手伝ってくれたら、褒美としてとれた芋で芋の味噌汁くらい出すよ」と。なんてことないことですが、このくらい公民館の職員に心のゆとりがないと地域に何かあったときに、頭の容量を空けておかなければいけ

ないんですね。たまに時間があるときに「一緒に遊ぼう」と言われ、30分くらい抜けれるかなと思って事務所任せて下と一緒に言って、一緒にセミを捕まえたり、もしくは子どもたちの遊びの中に入ってみる。例えば、サッカーをしている子どもたちがいる。それに入れないうちの小さな子どもたちがいる。別の遊びをしている子どもたちがいる。僕としてはなんとか一緒に遊べる方法はないかと思って、サッカーのルールなんて自分たちで作ればいいので、最初は僕も一緒にサッカーに入って、少ししたら上のお兄ちゃんたちに「僕忙しいから、小さい子どもたちが危なくないように見ててね」と言って帰る。そういうことを何回かやっていると、その子たち自分たちで勝手に遊ぶようになるんですよ。小さなことですけど、部活に行かない子どもたちの居場所としても使ってほしいと思っています。

ただ屋上に子どもたちを連れていくことが多くなると、子どもたちがお母さんとスーパーに行ったときに、お菓子ではなくて野菜の種をねだるようになるようです。「しんさん、人参の種持ってきたから屋上に蒔こう！」と。今、時期が違うのに。（笑）「時期が違うよ。ほら、袋の裏を見てごらん」と言うと、「それでもいい」と言うので駄目元で蒔くと、何粒かは芽が出る。それでもいいんですよね。そういうことをやっていたりしています。

佐 藤：本当に細やかな対応をされていることがよく分かるお話ですよ。

前 城：食育とか社会教育をやろうと思ったとき、やはりある程度のりしろを持っておかなければいけないですよね。しかし、行政というのは効率・効果で話をするものですから、人員削減の発想でしかいかないので、地域づくりがそんな簡単にいくもんじゃないんですよね。さきほどおっしゃったように、対応の仕方のセンスが。地域づくりの将来を決めるんじゃないかなと思います。

佐 藤：地域をつなぐ役割、それ自体が価値があるということをちゃんと作って持っておかなければいけないということなんでしょうね。

大 城：今日は参考になるようなことばかりで、実際自分たちの周りの自治会を見ても、そういうことができる仕組みを考えようとしていないというか。そこに悔しさを感じたりします。（笑）気づいてはいるはずなんですけど、誰か関われる人がいない。中央公民館もあるんですが、サークル活動一環なんです。みんな集まって部屋借りて活動して終わり。発表会などあると思うんですが、実際に市民とつながる形なのかといえば、そうではない。他の地域を真似るなり、一歩踏み出したいなと思いました。

佐 藤：南さんが大学で環境社会学を学ばれたことは、すごく役に立っておられますよね。環境社会学は理論と実践をバランスよくやらないとできない学問なので。

南：社会教育、生涯学習の話の中では、あくまで市民の主体的なことに任せるということが強く打ち出されているものですから、本当はあまり強い呼びかけというのは、多分これまで社会教育に携わってきた方々も遠慮していたと思います。でも、僕は入りながら、遠慮をするというよりも、もちろん主体性をもってやるんですが、こちら側からのアプローチもしくは間口は広げておかなければいけないと思うんです。やりたいと思うときにやれるように、もしくは、やりたいと思えるような思いつき、ひらめくような企画を仕掛けていかないといけないと思います。

嘉 数：今日、呼び出したかった上原校長先生も面白い方ですよ。

久 高：私たちが学校に関わるようになって3人目の校長先生です。全員女性だったんですが、1人目は退職されて、2人目は1年で転職、そして現在上原校長です。それぞれ校長先生にも個性やタイプがありまして、理科系、体育系などですね。上原校長はたぶん社会教育系だなど、最初で読んでいました。大変そういうことに一生懸命です。

南：上原校長は壺屋小学校のときにも、今の中央公民館の館長である前原館長とも地域の活動と一緒に取り組んでいたようです。壺屋はこの数年、焼き物祭りなどに力を入れています。

久 高：照屋という先生もいらっしゃるんですが、今年度で離任なので六年生を持って終わりたいと本人は思っている。ところが、他の2人の先生は豆腐作り未経験。そこで、上原校長は、校内人事で残してあります。「今年最後なんだからしっかり計画を実践して、他の2人に豆腐作り教えて。そのうちの1人は次の三年生に残すので」と、校内人事まで関わってきています。それで真地小学校三年生の総合的な学習の豆腐作りは、永遠につないでいこうという意気込みが定着できていて、嬉しいですね。

嘉 数：確か、この照屋先生がカリキュラムを作成しているんじゃないよね？

久 高：はい、今は別の先生が作成しています。そして、南さんも注文していて、私も構想があるって言っているんです、誰が来ても、これを見れば総合的な学習の豆腐作りができるような、もっと密な計画書を出してほしいという要望を出しているわけです。今作っているのはある意味素案で、分かる人が見れば分かるんですが、新しい先生を見るとそれを見ただけでは分からんだろうなという感じです。私たちがいるのでいつでもサポートはできるんですがね。

南：僕から注文したというのは、学校数が増えたときに、新しい先生方、まだ経験したことない先生方に説明するときに、これまでも資料作って行ったんですが、先生方の顔が今いちピンと来ていない感じがします。3回目ぐらいからやっと流れが見えてくるんですけど、その頃には夏くらいに差し掛かっています。もっといい方法はないかなと思っていたら、学校の先生が使っているカリキュラムに落とし込んで提案するという方法があることに気づいたんです。

いくつか別の学年のカリキュラムを先生からもらったので、入れ込み始めてみたら、そういえば真地小学校ではどんなふうなカリキュラムで今年実践したんだろうと思って、久高さんをお願いしてカリキュラム的なものが手に入らないか相談したら、久高さんは「もう少しでまとめるから！」とおっしゃっていました。頑張っているようです。

久 高：まだ素案ですから、それでもいいと思うんですが、僕からするとこれは納得しない、校長も納得しない。みんなが納得できるカリキュラムを作してほしいなと思っています。

前 城：私がPTA会長をしたときに、最初は壁が厚かったんです。しかし、息子が四年生のときに担任の先生が僕に「授業持ってくださいませんか？地域の人を呼んでやってくれませんか？」と相談されました。これは画期的なことだったんです。そのとき初めて1年間のカリキュラムを見て、授業の流れが分かりました。僕にお願いされたことの意味や、これが次の学期でどう展開されるということが分かったので、どんな授業が必要か分かって、自分なりに考えてテーマ立てて提案したら、先生に喜ばれました。地域の人を呼んで全体をコーディネートしました。90分の授業だったんですが、子どもたちも目が全然違うんですよ。毎日いる先生ではなく、たまに来る人が授業するから違うんですよ。また、これが二学期、三学期で展開して、最後に総括するという流れも分かりました。

一度そういうことをやると他の先生も分かるんですよ。前城会長ってこんなことができるんだ、と。だから、信頼度がガガッと上がりました。中に入り込むには信頼関係がないとできないし、入ることによって分かることもいっぱいあります。

久 高：あとになって先生方が酒の席で洩らしたんですが、最初は私が元校長だと聞いて構えてしまってビクビクしていたんだと。「そうだったか、ごめんね。僕はいつも絶好調ではあるが校長ではないよ。（笑）だからこんなことができるんだよ。」と言ったんですね。「あれからは思いません。」と、飲みながら話しました。

前 城：PTAの組織とはどんな関係ですか？

久 高：私たちの「かりゆし友の会」に対しては、PTAから大変な信頼です。PTA作業も片付けるのはこちらで、お父さん、お母さんたちにはあまり難儀させないでおこうとやっています。特に幼稚園に相当てこ入れしているもんですから、そのまま小学校に上がってもお母さんたちといつまでも信頼関係あります。幼稚園で関わっていれば、小学校六年生まで同じように関わっていけるんです。久高のおじいちゃんと卒業するまで覚えているわけですからね。

また、私は「うちな一口クラブ」を受け持っています。もう一人の高校教師上がりの仲間は、刻字の専門で「刻字クラブ」を受け持っています。クラブでは高学年の四～六年生と関わります。去年「うちな一口クラブ」だった四年生が五年生、六年生になっても必ず「ハイサイ！」とうちな一口で挨拶してくる。顔だけは覚えていますので、「ハイサイ！元気やてい？」と返します。子どもたちとうちな一口で挨拶できるというのはとても嬉しいです。こういう種をたくさん蒔きたいなと思っています。「うちな一口クラブ」というのは、方言を覚えるんじゃなくて、沖縄には琉球王国時代からこんなに素晴らしい文化があったんだということを、しっかりと身につけるためにこのクラブはあるんだということを、わずか8回で子どもたちの心に種を蒔きたいというのが僕のねらいです。そして必ず三味線ができる子がいますので、その子に「ていんさぐの花」を弾かせて、僕が歌詞を解説して、沖縄の言葉ってすごいということを感じてもらう。下り言葉というのもありますので「意地ぬ出ら手引き、手ぬ出ら意地ひき」を書いて白銀堂の話をしてみたり。沖縄の文化はこんなに素晴らしいんだということを少しでも分かってもらいたいです。とても楽しいです。

嘉 数：お時間になりましたので、これでお開きにしたいと思います。久高さん、南さん、今日は本当にありがとうございました。